

対談

現代人と死

いづき ひろゆき
五木寛之

たぐち らんてい
田口ランディ

しまぞの すずむ
〈司会〉島蘭 進



■死の問題が語られる時代

島菌 この雑誌は「宗教」という名前が入っていますが、今は、かつて宗教という名であったものが、宗教という看板を掲げないで、考えられたり、感じられたり、探究されたりしているのではないかと思います。お二人の書かれているものには、そういう広い意味での宗教的なものがあるのではないかと思うのです。

お二人は、世代も違えば、書かれている世界も違っていますが、共通点の一つとして、人生相談というものが表現活動と自然につながっているところがあるように思われます。普通の人が悩んでいるときに身近に聞いてみたい言葉と申しましょうか。そして、そこには、お二人の人生における死との関わりというものが背後にあるのではないかと感じているのですが。

五木 読者の悩みに答えるという「人生相談」がありますね。大正時代の身の上相談が文庫になっていて、それなど実に面白い。開高健さんと今東光さんとか、最近おやつと思ったところでは松浦理英子さんなどもやつて

らっしゃった。意外に思われるかもしれませんが、僕はそういう「人生相談」というのを一度もやったことがないんです。

インターネットでは、いろいろ死についての呼びかけとかそういうのがあったりするようですね。

田口 私は「インターネットの女王」などというキャッチフレーズでデビューしたんですが、それは幻冬舎の見城さんの戦略ですね。実は私自身はほとんどインターネットをやらないんです。

五木 それは意外だな。

田口 何をやっているかというところ、メールマガジンという一人新聞みたいなものをつくって、エッセイを書き、登録しているかたに送っているという、それだけなんです。ただ、その登録者が十万人を超えてしまったんですね。

五木 十万人というのはすごい。

田口 十万人いればそこで市場ができてきますから、それでインターネット作家などと呼ばれているわけなんですけど。

五木 最初の小説はインターネット上で発表されたものを活字にされたのですか。

田口 いえ、書下ろしです。

五木 そうか。イメージでものを言ってしまったて申し訳なかったです。イメージとは大抵そういうものなんですよ。が、実際話を伺ってみると、違うものですね。

田口 ただ、個人で十万人の読者というのは、インターネットの文芸分野ではまだないはずで、そういう意味では先駆的だったんだと思います。メールでレスポンスが来るんですけど、読者が二万人ぐらいまでは、一日に三十通ぐらいで、まだ読める範囲だったんです。ところが、五万を超えると手に負えなくなってしまうて……。でも、何通レスポンスが来るかというのはわかるんです。そうすると、テーマや書きかたによって反応がまったく違うんですね。死の問題を扱ったときは非常にレスポンスが多いので、読者は身近な問題として受け止めているんだなあと思うんです。

五木 死の問題は、この十五年ぐらい、非常に大きな問題としてクローズアップされてきました。死を専門に研

究されるかたも出てこられたし、自殺の問題も、メディアが昔のように自己規制しなくなってきたと思います。

こんなふうに死が話題になってきたのは、生きかたの問題でもあって、生と死をワンセットにして語るというのが、この十年、十五年ぐらいの傾向ではないでしょうか。そういうなかで、僕も以前、『文藝春秋』の誌上で読者に呼びかけて、「うらやましい死にかた」という企画をやったのですが、名もない市井の人で、宗教的にきちっとした自覚のもとに本心に立派な死にかたをしていくという人がたくさんいて、感動しました。日本の民衆の底辺にあるような人たちなんです。特に宗教的な教養とか哲学的な思索とかと関係ないところで、見事に死んでいく人がこんなにいるのかとびっくりしました。その前に山田風太郎さんが『人間臨終図巻』という面白い本を書かれました。これは傑作です。このあたりから死という問題が正面から捉えられるようになってきたのではないのでしょうか。そして、学者のかたとか、ターミナルケアに関わっているかたとかが、特に最近では自殺について発言されるようになってきていると思います。



五木寛之氏

■インターネットのなかで語られる死

五木 今、インターネットで呼びかけて一緒に自殺をするということが報道されていますが、ああいうのは実際あるんでしょうか。

田口 あると思いますね。インターネットというのは不思議なメディアなんです。インターネットという通信手段と、インターネットのなかで行われる人間関係とは分けて考えなくてはならないと、前から考えているんで

す。私はパソコン通信の初期からの会員だったんですが、そこは非常に閉じた世界、何か秘密クラブ的な要素をもったコミュニケーションとして成り立っていたんです。それがそっくりインターネットに移行したので、私はかれこれ十二年ぐらいそうしたヴァーチャルなコミュニケーションを見てきているわけですが、そういう通信手段を使ったコミュニケーションの問題として、一つ面白いポイントがあつて、それは情報が非常に少ないということです。名前と少ない文字情報だけで相手のことを想像しなければならぬという世界なんです。

五木 情報が少ないんですか。インターネットというのは、過剰なまでに情報が溢れていると思つていましたが、田口 インターネットのなかには情報が溢れているんですが、そのなかでのコミュニケーションというのは、文字情報だけで、相手の名前も本当かどうか分からない。これを長くやっている、一〇パーセントの情報で残り九〇パーセントを埋め合わせようとするようになるんです。そこで何をやるかというと、自分に都合のいい九〇パーセントをつくるわけです。一〇パーセントの実像に、

自分の都合のいい九〇パーセントが付加された人物と毎日やりとりするようになるから、トラブルが多くなるわけです。

五木 相手の言っていることも本当かどうか分からないしね。

田口 特に男女関係では、相手に自分の欲望を投影してしまうんですね。それでいて、他人にも自分とは違う欲望があるのだ、ということが今の予はわからない。だから危険な誘いにこのこ出かけて行ってしまふんです。



田口ランディ氏

五木 インターネットというのは不思議な世界だな。僕は全然縁がないので想像するしかないんですが……。そのなかで「死」について語られることがあるわけですか。田口 それはみんなすごく好きなんです。ある男の子を取材して聞いていたんですが、学校へ行って辛気臭い話をする、いじめの対象になってしまふから、とにかく学校ではキャラクターを演じなければならぬというんです。今の学校のクラスというのは、誰がどういうキャラクターなのかというのが何となく決まって、そのキャラクターをみんな演じているというのが、友達づきあいというものらしいですよ。くたくたになるまでキャラを演じて、自分が何だかわからなくなつてしまつたところで、「死」と近くなつていく。それでインターネットで死を語るサイトというのに行くと、自分と同じようにくたくたに疲れた人がいて、くたくたに疲れた状態でくたくたに疲れたことを書きまくるわけです。こんなことを続けているなら、生きていても死んでも同じじゃないかというところへ行つてしまつて、じゃあ死のうということになるんです。